論文の内容の要旨

ソロモン諸島マライタ島北部のアシ／ラウにおける「海に住まうこと」の現在：別様でありうる生の民族誌

里見龍樹

ソロモン諸島マライタ島北東岸に広がるサンゴ礁の内部には、アシ（海の民）またはラウと呼ばれる人々が岩を積み上げて築いた人工の島が、90 以上点在している。今日でも、大多数の島には数人から数百人の人々が居住しており、これらの人々は、マライタ島本島海岸部での自給的農耕と漁撈や市場活動を組み合わせた生業を営んでいる。本論文は、アシの人々が営んできたこのように特徴的な生活様式、現地語では「海に住まうこと（トーラー・イ・アシ）」の現状について、民族誌的に明らかにしようとするものである。

調査地として取り上げるのは、マライタ島海岸部に位置する集落 T 村と、その沖合に広がる 16 島からなる人工島群である。この人工島群は、主として 19 世紀末以降に形成されたものと推定されるが、他方 T 村は、1970～80 年代に、一連のサイクロン被害を契機とした沖合の島々からの移住によって形成された、比較的新しく、また多様な居住者からなる集落である。

調査地に住むアシの人々には、自分たちの居住・生活の現状を一方で受け入れつつ、他方で同時に、それとはまったく異なる生活のあり方を不断に想像しているという、二面的な状況が認められる。たとえば多くの人々は現在、海岸部における人口増と耕地不足への懸念から、近い将来にマライタ島内陸部に移住するという構想を抱いている。このような構想は、「われわれの住み場所」としての現住地の自明性を疑問に付すとともに、「われわれはアシである」という集合的同一性をも相対化するものである。本論文ではこのように、現にそうであるような居住・生活が、つねに同時に別様な、またそれ自体として多様な居

住・生活の可能性をともなっており、そのために、人々の生がそれら異なるあり方の間で揺れ動き続けているような状況を、「偶有性」の概念によって言い表す。そのような特質は、今日のアシにおける居住・生活のさまざまな側面に見出され、本論文では、そのような偶有性が何に由来し、また、それによってアシの生がどのような特徴を帯びているかを多角的に考察していく。このような考察は、理論的には、対象としての「文化／社会」の同一性についての想定を離れ、対象をいかにして動的で非同一的なものとしてとらえるかという、近年の人類学理論における探究と軌を一にするものである。

アシの人工島居住一般と調査地について紹介する第１章に続き、第２章では、祖先たちが反復的な移住を通じて人工の島々を次々と創出してきた過程を物語る、「アイ・ニ・マエ」と呼ばれる一群の伝承について考察する。これらの伝承によれば、今日のアシの祖先たちはもともと内陸部に居住していたが、さまざまな経緯により内陸部から海岸部、そして海上の人工島に移住し、さらには新たな人工島の創設を繰り返してきた。アシの伝承は、移住史の各段階を、親族との衝突など根本的に偶発的な出来事の結果として語るものとなっており、個別の人工島は、そのような出来事としての移住と定着を、現在において具現するものに他ならない。このように、伝承に語られる出来事の偶発性が個別の島のかたちで保存されることにより、アシの居住・生活の現状には、それが別様でもありえたという偶有性がつねに付与されることになる。

第３章では、前章で見た移住史とも不可分な、キリスト教の一般的受容以前に行われていた特徴的な葬制「トロラエア」について考察する。トロラエアとは、死者の頭蓋骨を切除・保管し、一定期間の後に、しばしば数キロから 20 キロも離れた特定の場所に海上移送し安置する慣習である。アシの人々はその意義を、移住を通じた成員の分散の下、氏族の祖先崇拝の一体性を維持することにあったと説明する。しかしトロラエアには、そのような氏族単位の性格に回収されえないもう一つの側面、すなわち、婚出先で亡くなった女性に対する個別的な葬送としての側面がある。このような女性の葬送は、一見氏族単位の葬送に包摂されるかに見えるが、実際には両者の間には、氏族全体があたかも個別の女性のように葬送されるという逆説的な同型性が見出される。そのような逆説的性格により、アシの葬制は、単に氏族の集合的同一性を確認するのではなく、むしろ「われわれ」の居住の現状に内在する他者性・偶有性を繰り返し表現するものとなっていたと言える。

第４章では、アシの「海に住まうこと」における、20 世紀を通じて進展したキリスト教受容の帰結について考察する。キリスト教受容を通じた居住・生活の根本的変化の認識は、アシにおいて、「カストムの時代／教会の時代」という対比によって表現されるが、そのような歴史的変化は、キリスト教受容の直接の産物とみなされる現在の景観や居住パターンを通じて、この人々に体験され続けている。今日のアシは、「われわれは、本質的にキリスト教的な空間の中で、キリスト教徒として生活している」と日常的に了解しているが、実際にはそのような生活は、決して自明の、安定したものではない。このことは、現在の居住・生活を不断に揺り動かす、疎遠にして身近という「カストム」の両義的な存在によく

示されている。そのような揺れ動きの中で、今日のアシは、伝統的なそれとも「教会に従った」現状とも異なる、別様な居住・生活の可能性をたえず想像しているのである。

第５章では、伝統的にアシの主要な生業である漁撈の現状について検討する。今日の T 村周辺では、かつての集団的網漁に代わり、夜間に漁師が単独で行う潜水漁が支配的になっており、また都市への魚の出荷が重要な現金収入源となっている。そのような夜間の漁は、サンゴ礁内の複雑な海底地形や、潮汐および月齢の周期との密接な関連の下で行われており、そこには明確な空間的・時間的限定性が認められる。すなわちアシの潜水漁は、商業的性格の反面で、自分たちが漁をしない空間および時間という「余白」をつねに残すような性格をもつのである。現在のアシは漁業に対し、その現状を否定的に評価する反面で、いまだ実現していないその商業的可能性に期待するという両義的な意識を抱いているが、このような両義性は一面で、海の中に、現状では自分たちが漁をしない――したがって、別様な漁撈が導入されるなら、一転して漁の対象とされうる――領域をつねに創出・確保する、アシの漁撈活動の特質に由来していると考えられる。アシの漁撈はそのように、「われわれ」の居住・生活を、つねに別様でもありうるものとして維持するのである。

第６章では、自給的焼畑農耕をはじめとする土地利用と、「住まうこと」の現状に対するアシの意識の関連について考察する。耕地と休閑地が入れ子関係をなす耕作法などに見られるように、アシの農耕には、「土地に手を加えること」と「手を加えないこと」がつねに並存する、前章で見た漁撈とも同様な両義的性格が認められる。現在のアシは一方で、海岸部における耕地の不足や、間世代的に継承される有用植物の減少などに、自らの「住まうこと」の道徳的危機を見出しているが、他方で同時に、「われわれ」は別の場所、具体的には内陸部で別様の居住・生活を営むことができる、という積極的な見通しをも抱いている。このように二面的な意識は、一部を休閑地の茂みとしつつ畑を耕作するように、現住地において自らを潜在的に不在とさせつつ居住し、同時に、生い茂る植物に別の場所での居住・生活の可能性を読み取るという、アシの多義的な土地利用に根差したものと考えられる。

終章に当たる第７章では、別様な居住・生活に向かうアシの衝動を端的に表す例として、太平洋戦争直後のマライタ島で展開された反植民地主義運動、マーシナ・ルールの記憶について論じる。今日のアシはマーシナ・ルールを、父母、祖父母たちが、大規模な新集落や集団農園を建設することで、まったく新しい集合的な居住・生活を実現しようとした試みとして認識している。またアシの認識において、マーシナ・ルールとそれに続く社会経済的な革新の試み、具体的には 1960 年代に組織された漁業協同組合は、あくまで一体をなすものである。これらの試みは今日、かつての新集落の跡地など、景観の中の一群の痕跡を通じて日常的に想起される。アシにとって、マーシナ・ルールとそれに続く展開の記憶は、今日では見られない調和的な集合的生活の記憶として、一方で現在の「われわれ」に困惑を覚えさせるものだが、他方でそれは、「われわれ」がどのような集合的生活を実現しうるかについての未知の可能性を示唆するものとしてある。このような両義性において、

マーシナ・ルールとそれに続く展開の記憶は、アシにとって今日的な意義を帯び続けているのである。

以上の考察の一つの特徴は、それがアシを一貫して、「われわれ」の同一性には回収されえない＜他なるもの＞と向き合う人々として描いている点にある。そのような＜他なるもの＞は、無人の人工島や草木の茂み、「われわれ」が関わることのできない深い海などとして記述され、そこではアシが、そのような他者性との関わりを通じて、自らの潜在的な他者性――「われわれ」の生が別様でもありうるということ――を体験・認識していることが示される。また本論文の後半は、そのような他者性が、とくに自然環境との関わりにおいて体験されるものであることを明らかにしている。本論文は、アシの自己に内在する他者性を、そのような「自然」との関わりに根差した――したがって、通常の社会文化的領域を超えた――ものとして考察するものであり、その意味で、アシにおける「住まうこと」を、一つの「存在論」として描き出すものである。